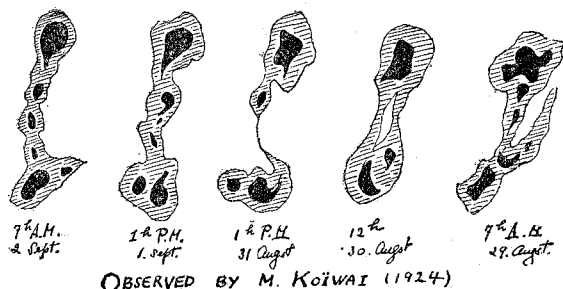


Title	大正十三年九月の太陽面の活動
Author(s)	三澤, 勝衛; 小岩井, 誠
Citation	天界 = The heavens (1924), 4(47): 439-441
Issue Date	1924-11-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/160187
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



大正十三年九月の太陽面の活動

観測者 三澤 勝衛、小岩井 誠

山口の村田英藏氏と京都の池田政晴氏とが共に止むを得ざる事情の爲めに観測が出来なかつた事は残念なことであるが、新たに、長野縣の小岩井誠氏が三時の望遠鏡を以て熱心なる観測を始められた事は非常に喜ばしい事である。

九月に於ける黒點及白紋の活動は第一表に示す通りである。表中米を附したるは河西慶彦氏が三澤氏にかわつて観測されたるものゝす。

一日に現れて居る二つの黒點群のうち多くの黒點よりなつてゐるものは三澤氏の観測によれば前日八月三十一日に中央子午線を通過したもので

十二個の黒點よりなり三澤氏はこのうち二個を大黒點して數へてゐる。第一圖はこの群の變化の狀態を小岩井氏がスケッチしたもので、八月廿九日から九月三日までの變化である。この黒點群は八月の末より次第に發達し思ふに九月の二、三日頃に最も發展したもので、小岩井氏の注意書によれば三日の午後五時に多くの小黒點に分裂してゐる。然しすでに西の端近く來てゐるので、その發展の模様を詳しく見る事は出来ない。三澤氏の観測によれば四日になつてこの黒點群の周圍に著るしい白紋が現れてゐる。

兩黒點群は共に太陽の南半球に屬し赤道に近い。後の方の一個の黒點からなる群は前者と大約四十五度ばかりはなれてゐるがこれが三日に丁度中央子午線を通過した。

七日に多くの黒點からなり二日三日頃に最發展をした群は西端に没し、そのかわりに四つの黒點よりなる黒點群が西方南半球の高緯度の場所に突發した。この黒點は小岩井氏は観測してゐないが三澤氏の観測によれば、九日に既に西端に來て居り、白紋によつて圍まれてゐたが、十日には白紋を残して三日に中央子午線通過の大黒點と共に西設してしまつた。

第 一 表 (September 1924)

觀測者	三澤勝衛			小岩井誠			
	日附	黑點群	黑點數	白紋	黑點群	黑點數	白紋
1	2		12+1=13	0	2	5+1=6	
2	2		36+1=37	0	2	6+1=7	
3	2		24+1=25	0	2	11+1=12	
4	2		12+1=13	1	—	—	
5	—		—	—	—	—	
6	2		3+1=4	2	—	—	
7	2		1+4=5	0	1	1	
8	2		1+3=4	1	1	1	
9	2		1+2=3	2	1	1	
10	1		3	2	0	0	
11	1		10	2	0	0	
12	—		—	—	—	—	
13	1		15	2	1	6	
14	—		—	—	—	—	
15	—		—	—	—	—	
16	1		7	1	—	—	
17	1		8	1	—	—	
18	1		3	1	—	—	
19	2		5	2	1	2	2
20	1		2	1	1	2	2
21	—		—	—	—	—	—
22	1		9	1	1	6	2
23	—		—	—	1	3	?
24	2		26+1=27	0	1	8	2
25	3		14+1+2=17	1	2	1+9=10	0
26	2		3+1=4	0	2	1+2=3	2
27	—		3+2	—	—	—	—
28	5		+1+2+2=10	1	2	5+1=6	2
29	3		5+1+1=7	2	—	—	—
30	3		7+11=9	2	—	—	—
觀測日數	(23日)				(17日)		(8日)
總和	44	240	25	21	76	12	
一日平均	1.9	10.4	1.1	1.2	4.5	1.5	

此日東側に三個の黒點より一群の黒點突發し十一日、十三日次第に發展してゐる。小岩井氏十三日にこれを認めてゐる三澤氏に依れば、この黒點群は十四日に中央子午線通過のはずであつたが曇天の爲めに觀測は出来なかつた。十六日以後の觀測によれば其の數は少しづつ減少してゐる様な有様で二十日に西没して白紋のみを残してゐる。

次に濃厚な白紋が十六日以後東方に認められたが、十九日に至りて四個よりなる黒點群も變化した。これは小岩井氏も等しく觀測してゐる。同氏の送れるスケッチは非常によくその發展の模様を物語つてゐる様である。この黒點群は廿三日に中央子午線通過の筈で廿八日には西方約七十度位の緯度にあり未だ西没の時でないにかゝわらず、白紋のみを残して黒點は消えて居る。即ちこの黒點群は十九日に生れて廿八日に死んだわけで約九日の生命のものであつた。

廿五日西方北半球に二小黒點よりなる群突發したが翌廿六日には消失した、甚だ短生命のものである。

廿八日(度分は廿七日より)は太陽面が非常に活動し、大黒點を有する黒點群が東方の低緯度に出現した、これは小岩井氏の午前八時の觀測にすでにみこめてゐる。この外中央子午線附近に三つ、西北中緯度に一つ都合この日は五個の黒點群が見られたわけでうち二つは翌廿九日に消失し他の三つは月末まで活動を續けて居た。小岩井氏の白紋の觀測は十九日か

ら始まつてゐる。大黒點數は表にはのせなかつたが次の如くである。

	大黒點數	觀測日數	一日平均
三澤	五〇	三十三日	二・二
小岩井	五	十七日	〇・三

三澤氏と小岩井氏との觀測の結果が非常に異なるがこれは大黒點をざれ位の大きから彩るかに依るので少しも不思議なことはない。即小岩井氏が大黒點として數へたものが三澤氏のそれよりも遙かに大が大きいだけである。小岩井氏今後の觀測に於ては今迄の標準を變えない事を希望する。(荒木記)

天文彙報 10月30日

新彗星發見 1924d

獨ベルゲル天文臺 パーテ氏發見

10月28日8時55分の觀測

赤 徑 21時5分16秒 日差14分56秒

赤 緯 北15度 28分 日差南40分

光 度 十等半